人間関係研究（南山大学人間関係研究センター紀要）, 14, 133-168.

■ Article

M-GTAによる箱庭制作過程の促進機能に関する研究

―コアカテゴリー①【内界と装置の交流】に焦点を合わせて―

楠　本　和　彦
（南山大学人文学部心理人間学科）

要　旨

本稿では、２人の箱庭制作者の主観的体験をデータとして、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。その分析結果の内、本稿ではコアカテゴリー①**【内界と装置の交流】**に焦点を合わせ、詳述・検討する。①**【内界と装置の交流】**は、『単一回の制作過程・作品』内の『制作過程』における「内界」と「装置」との交流に関するコアカテゴリーである。「内界」と「装置」は、交流し、双方向で影響を与えあっていた。それには、１）「装置」から「内界」への影響、２）「内界」から「装置」への影響、３）双方向の影響があった。

①**【内界と装置の交流】**は、内界と装置が交流することによって、ミニチュアに箱庭制作者の内的プロセスが重なりあい、ミニチュアが単なるモノではなくなっていく過程である。この過程は現物の＜もの＞であるミニチュアが＜こころのこと＞（藤原、2002）になっていく主観的体験であると考えられる。現物の＜もの＞であるミニチュアが＜こころのこと＞になっていくことによって、ミニチュアは箱庭制作者の心を表現するものとなり、そのことを通して、箱庭制作面接は箱庭制作者の自己理解・自己実現・自己成長の促進に寄与できると考えることができる。

キーワード
箱庭制作過程における促進機能、箱庭制作者の主観的体験、M-GTA

Ⅰ．はじめに

楠本（2012）では、継続的な箱庭制作面接における１人の箱庭制作者（A氏）の主観的体験を、木下（2003）に従い、修正版グラウンデッド・セオリー・ア

プローチ（M-GTA）を用いて分析した[*1]。M-GTAの分析結果から、促進要因が単独で、箱庭制作面接における自己理解、自己実現、自己成長に寄与するのではなく、それぞれの促進要因同士が交流し、影響を及ぼし合う過程において、促進機能が働くと捉えられた。そこで、箱庭制作面接の中心的な促進機能を、箱庭制作面接の促進要因間の『交流』であると解釈した（結果図、図１）。楠本（2012）では、箱庭制作面接の促進要因の交流の内、⑥**【制作過程と外界・日常生活の交流】**、⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】、⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】について詳述・検討した。その後、２人目の箱庭制作者（Ｂ氏）のデータも加え、M-GTAの分析を行ったが、結果図の変更の必要性はなかった。ただし、概念名やカテゴリーには修正が必要であったため、その修正を行った（楠本、2014）。楠本（2014）では、箱庭制作者２人のデータに基づき、⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】、⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】について詳述・検討した。

そこで、本稿では未検討であったコアカテゴリー①**【内界と装置の交流】**に関する箱庭制作面接の促進機能について詳述・検討することを目的とする。

具体例の記し方について、**＜貝殻ってやっぱりそういう女性的なって言うイメージある？＞この辺のは‘砂箱の左上を指して’そういう感じがありますね**
＜あ、この辺のは＞こっちのは‘右上の貝を指して’もうちょっと違った感

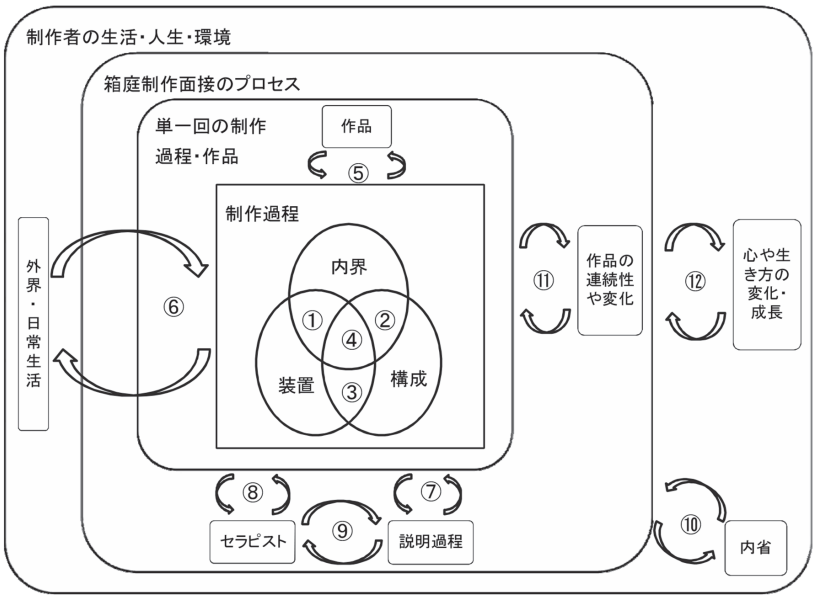

図１　箱庭制作面接の促進要因間の交流(楠本,2012)

[※1] 調査方法、分析方法などの詳細は、楠本（2012）または、楠本（2014）を参照していただきたい。

じですね。＜あぁ、なるほどね。＞えぇっと、何ていうんだろ、自然のもの、海のもの、んと、＜うん、そっか＞うん、自然界のものっていう感じですね＜なるほど、タコが隠れてるところは自然界＞うんそうですそうです（A氏調査、3-6)、を例として説明する。カテゴリー、概念の具体例とその前後の箱庭制作者の言葉を網掛け、ゴシック体で示した。概念の具体例に当たる部分に〰を付した。箱庭制作者の行動や様子を‘ ’内に記述した。具体例内の調査者の言葉を＜＞内に示した。具体例の最後の（ ）内にデータの出処を記した。例えば,（A氏調査,1-12）は,「A氏」の「調査的説明過程」における言葉であり,それは「第1回面接」の「12番目の箱庭制作過程」における言動に関する主観的体験である。（B氏内省,2-4,制作・意図）は,「B氏」の「内省報告」に記された主観的体験であり,「第2回面接」の「4番目の箱庭制作過程」における「箱庭制作過程中」の言動に関する「意図」である。

促進要因間の交流を示すコアカテゴリーを【 】に統一した。カテゴリーは＜＞で、概念は［ ］で示した。概念、カテゴリーは、ゴシック体で示した。

カテゴリー、概念の具体例の詳細や検討において、データを補足するために、ふりかえり面接における調査参加者の言葉を記載する場合がある。ふりかえり面接における調査参加者の言葉は［ ］内に明朝体で示した。ふりかえり面接における言葉で、それに関係する具体例に該当する部分に＿＿＿を付した。詳細を示したり、検討する中で、他の具体例を示す場合があった。そのような場合には、検討する部分に-------を付した。

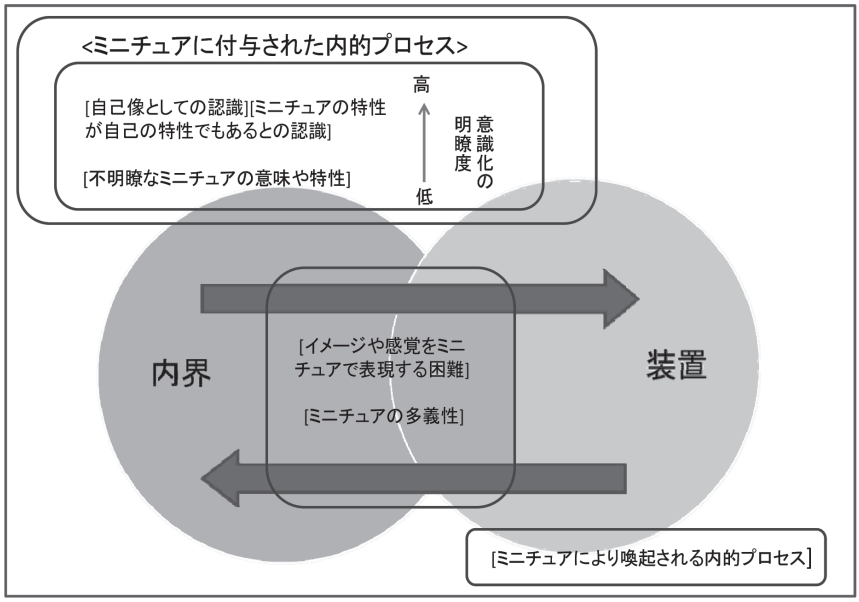

図2　①【内界と装置の交流】

Ⅱ．①【内界と装置の交流】の概要

①【内界と装置の交流】は、『単一回の制作過程・作品』内の『制作過程』における「内界」と「装置」との交流に関するコアカテゴリーである（図２）。「内界」と「装置」は、交流し、双方向で影響を与えあっていた。それには、１）「装置」から「内界」への影響、２）「内界」から「装置」への影響、３）双方向の影響があった。１）には、概念［ミニチュアにより喚起される内的プロセス］があった。２）には、カテゴリー＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞、その中に［自己像としての認識］、［ミニチュアの特性が自己の特性でもあるとの認識］、［不明瞭なミニチュアの意味や特性］の３概念があった。３）には、概念［ミニチュアの多義性］、［イメージや感覚をミニチュアで表現する困難］があった。

２）＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞内の概念には、意識化の明瞭度に関して、差があった。［自己像としての認識］、［ミニチュアの特性が自己の特性でもあるとの認識］に関して、箱庭制作者は、その内的プロセスをかなり明瞭に意識化していた。それに対して、［不明瞭なミニチュアの意味や特性］では、ミニチュアの意味や特性に不明瞭な部分があった。３）の［ミニチュアの多義性］は、その下位タイプによって、意識化の明瞭度に差があった。

以下に、カテゴリー、概念、具体例を挙げ、①【内界と装置の交流】で見いだされた促進機能について詳述・検討する。

Ⅲ．「装置」から「内界」への影響の詳細と検討

１）［ミニチュアにより喚起される内的プロセス］の詳細と検討

（１）－１．［ミニチュアにより喚起される内的プロセス］の詳細

「装置」から「内界」への影響について詳述する。「装置」から「内界」への影響には、概念［ミニチュアにより喚起される内的プロセス］が見いだされた。［ミニチュアにより喚起される内的プロセス］は、「ミニチュアを見たり、触れることにより喚起される感覚・イメージ・感情、考えなど」、と定義された。

ミニチュアにより喚起された「感覚」や「考え」の具体例を以下に挙げる。Ｂ氏第１回箱庭制作では、砂箱中央に水の表現がなされた（写真１）。それは、Ｂ氏にとって、核になる中心の部分（Ｂ氏調査、1-2）であり、命とか生活とかいう、この中心に湧きあがるもの（Ｂ氏自発、1-2）であった。その部分について、調査的説明過程で、以下のように語られた。実際にそれを表わすのに、十字架を置くとか、マリア像を置くかというと、それには、抵抗があったわけです。＜なるほど＞で、つまり、それが、あの、いかに、その、表現しつくせない人為的な、その、形っていうんでしょうか。シンボルっていうか、うん、で、それを置くとかえって、その、自分が感じているとか、思っている、その、こんこんとわき出るような躍動感とかいう意味でなんか、表わすにはちょっとみすぼらしすぎるというか。うん、でまあ、それは逆に選ぶ気になれなかった

写真1　B氏第１回箱庭作品

（B氏調査、1-2）。実際には選ばれなかった十字架やマリア像は、置くには抵抗感があり、躍動感を表すには、みずぼらしすぎるという感覚があったことが語られた。また、それらのミニチュアは、人為的な形、シンボルであり、自分が感じているものを表現しつくせないとの考えが喚起されたことが語られた。

ミニチュアにより喚起された「イメージ」や「感情」の具体例を以下に挙げる。A氏第８回箱庭制作面接の内省報告に以下の具体例があった。女性のミニチュアを選び、砂箱中央に置く際に、白い陶器の肌が床に伏せている義母の弱々しい感じをイメージさせる。それで大切に扱わなければという気持ちが私の中におきてきた（A氏内省、8-5、制作・感覚）。この具体例には、白い陶器の女性のミニチュアから喚起された義母の弱々しいイメージと義母を大切に扱わなければならないというA氏の感情が示された（写真２）。

ミニチュアにより多様な内的プロセスが喚起された具体例を以下に挙げる。A氏は、第４回箱庭制作面接で、砂箱中央に、最終的に鳥の巣を置いた（写真３）。それ以前には、ベンチや貝殻もその場所に置いてみるが、結果的にはそれらは選ばれなかった。そのプロセスについて、調査的説明過程で、以下のように語られた。‘ ’内の記述は箱庭制作者の行動や様子を示す。ベンチは空っぽでなんだかさみしいんですよね。＜ふぅんうん＞（A氏調査、4-4）で、貝殻もうーん、棚に行った時は貝殻が目に留まって、あ、これいいかもと思って持ってきたんですけど、置くとなんとなく周りとそぐわない感じもするし、＜ふん、ふん＞やっぱり空っぽだし、＜うん、うん＞なんかさみしいなって＜ふん＞（A氏調査、4-5）で、もうベンチや貝殻を見ているときから、＜ふん、

写真2　A氏第8回箱庭作品

写真3　A氏第4回箱庭作品

ふん＞鳥の巣は目に入っていたんです‘Tの顔を見ながら’。＜ふん、うん、うん＞で、でも、なんだろうこう素直に手が伸ばせなくって＜ふぅん＞ベンチやら貝殻にしてたんですけど、＜ふぅん＞やっぱり鳥の巣を置いてみようと思って。で持って来て、あの、そいで、卵もなくてもいいかも知れないと思ってどけたら、やっぱりすごくさみしくなって、‘Tに顔を向けて’＜ふん、なるほどね＞これは卵はいるんだと思って、置きましたね。＜素直に、手が伸ばせないって言うのは、もう少し言うとどんな感覚＞うーん、なんとなくね、こう（間８秒）なんでしょうね、素直に手が伸ばせない（間７秒）これ、あの、貝殻もそうでしたけど＜うん＞貝殻も、この、巣も、＜うん＞卵を抱えた巣もそうなんですけど、＜うん＞すごくその女性のことを＜うん＞意識させる感じが＜うん＞私にはあるんですよ。＜うん、うん、うん＞特にこれは‘巣を指差しながら’こう子どもをかえすっていうね。＜そうだね＞うん私は＜ふん＞子どもがいないというところで＜ふん＞何か引っかかっている様な気も＜うん＞しますね（Ａ氏調査、4-6）。ベンチや貝殻から、空っぽなので、さみしいという感情が喚起させられた。また、鳥の巣から、素直に手を伸ばせないという思い、女性や子どもを意識させられる感じ、自分には子どもがいないという現状、そのことによる何か引っかかっているような気持ちという多様で、輻輳する内的プロセスが喚起している。

（１）－２．［ミニチュアにより喚起される内的プロセス］の検討

装置から内界への影響である、［ミニチュアにより喚起される内的プロセス］について検討する。この概念には、多くの具体例があった。本項の具体例に、ミニチュアを見たり、触れることにより、感覚・イメージ・感情、考えなどが喚起される様が見いだされた。

本概念の具体例を比較すると、喚起される内的プロセスが比較的シンプルなものから、複雑・多様なものまで、さまざまであることがわかる。例えば、本項に具体例として挙げていないが、Ｂ氏第８回箱庭制作面接の内省報告に船出をしていくイメージが湧く（Ｂ氏内省、8-1、制作・意図）があった。これは、棚に船を見つけた時に船出のイメージが喚起されるというシンプルな内的プロセスである、と捉えられる。

それに対して、一つのミニチュアから複数の内的プロセスが生まれるやや複雑な具体例もあった。例えば、Ａ氏第８回箱庭制作面接の具体例では、白い陶器の女性のミニチュアからまずイメージが喚起され、それに伴ってイメージされた現実の人物に対する感情が展開されていくという内的プロセスが見いだされた。また、具体例として挙げていないが、第１回箱庭制作面接でＡ氏は、ベルの金色から素敵な感じが喚起されたが、ちょっと頼りない感じも同時にあって選ばれなったという、一つのミニチュアから、アンビバレントな感じが喚起される主観的体験を語った。これらの具体例は、上に挙げた具体例に比べると、喚起されたイメージから感情が展開する場合やアンビバレントな感じなど、や

や複雑な内的プロセスとなっている。

さらに、多様な内的プロセスが喚起される場合があった。第４回箱庭制作面接でＡ氏は、砂箱中央に、ベンチや貝殻を置くがやめ、最終的に鳥の巣を置いた。そのプロセスについて、ベンチや貝殻から、空っぽなので、さみしいという感情が喚起させられた。それで、それらを置くのはやめにした。最終的に、鳥の巣が選ばれたが、その鳥の巣から、素直に手を伸ばせないという思い、女性や子どもを意識させられる感じ、自分には子どもがいないという現状、そのことによる何か引っかかっているような気持ちという多様な内的プロセスが、集約されていることが示された。

本項の具体例から、箱庭制作過程で、ミニチュアを見たり、触れることにより、感覚・イメージ・感情、考えなどが喚起されることが見いだされた。このように、箱庭制作では、現物のミニチュアによって、様々な内的プロセスが触発され、喚起される。藤原（2002）は、「実際手続きをつうじて、現物としての箱庭が、はたして現物としての＜もの＞からどのように内的なイメージの世界のことになっていくのか、また箱庭がどのように＜こころのこと＞として機能をもつようになっていくのかということ」が、箱庭療法における基本的な課題であるとする（p.128）。**［ミニチュアにより喚起される内的プロセス］**によって、ミニチュアは単なるモノではなくなり、箱庭制作者の内的プロセスが重なりあっていく。この内的プロセスは、＜こころのこと＞になっていく過程の一様相であると考えることができる。**［ミニチュアにより喚起される内的プロセス］**は、現物の＜もの＞が＜こころのこと＞になっていく過程を促す促進機能をもつことが確認された、と考える。

以下に、最後に挙げた、Ａ氏第４回箱庭制作面接での鳥の巣に関する主観的体験について、さらに詳しく検討し、イメージの集約性、直観的な意識（楠本、2011）、図と地、気づき、前概念的体験の観点から考察する。

上に挙げた具体例の後、調査的説明過程で以下のような会話が続いた。‘ ’内の記述は箱庭制作者の行動や様子を示す。また、以下で検討・考察する部分に＿＿＿を付した。**たぶん持たずに一生生きて行くだろうなっていうのは（間28秒）（小さな声で）それで手が伸ばせなかったんでしょうね。（中略）ちょっとなんだかつらいような切ないような気分になりますね。（中略）‘ハンカチで目の下をぬぐって’でも、いいもんだなと思いますね、やっぱりこうやって見て＜うん＞（間15秒）すごいですね、そういう風に考えると。この箱庭の意味って何か全然違ってくる‘声が震えて’、作ってる最中は＜うん＞もうちょっとね＜うん＞　なんか　あのぉ、（間）自己実現じゃないですけど、そんなような社会的役割を果たすとか、自分の成長とか＜うん＞そういうことなのかしらと思っていたけど、＜ふん、うん＞ふふふ（笑）ね。卵が、巣だと思うと＜ふん＞ね、全然意味が、置いてる最中はちょっとそういう感覚では見ていなかったので＜うん＞ちょっとなんだかつらいような切ないような気分になります**

ね。‘声が震えて’＜そうだね。そうだね＞‘箱庭を見つめながら、黙って、時折ハンカチで涙をぬぐっている’（間45秒）（Ａ氏調査、4-6）。鳥の巣は、箱庭制作過程では自己実現や自分の成長という内的意味やイメージとして、箱庭制作者に捉えられていた。このように鳥の巣は、自己実現や自分の成長という側面と調査的説明過程で明らかになった女性のことを意識させる感じという異なる内的意味やイメージが集約されていることがわかる。これは、河合（1969）が述べるイメージの集約性に関する主観的体験が示されていると考えられる（pp.17-18）。

Ａ氏第４回箱庭制作面接での鳥の巣に関する主観的体験は、別の観点からも考えることができる。それは、直観的な意識（楠本、2011）から捉える観点である。楠本（2011）は、「意味の認知は伴わないが、ぴったりだと感じることができる意識」を直観的な意識と定義した（p.113）[*2]。直観的な意識は、光元（2001）の下記の言及とほぼ同義である。光元（2001）は、ミニチュアを選び、それを置く過程における箱庭制作者の認識に関して、木を選び、置くことを例に挙げて以下のように記している（pp.24-25）。

> このとき私は自覚的には「木を１本、箱の中においた」という感覚をいだいています。しかしながら、私たちはこの木が含意的・象徴的意味を担っているであろうことを知っています。ということは私はこの木がいったい何を意味しているのか、含意しているのか、自分自身で必ずしもわかっていないということです。ところが、私の内奥の何かが「そう、そこでいいんだ」と答えてくれます。［中略］しかしながら、ただ一つはっきりしていることがあります。「理由はわからないが、この木は、箱庭の中のここにあることで、なぜだかピッタリしている」ということ（＝認識の成立）、このことだけははっきりしているのです。

光元はこのような意識の有り様の概念名を記していない。そのため、楠本（2011）では、直観的な意識という概念名を採用した。直観的な意識は、ミニチュアを巡る内的プロセスにも関連している可能性がある。以下にこの観点から検討・考察する。

鳥の巣がもつ箱庭制作者にとってのイメージや意味の一側面である、自己実現や自分の成長との内的意味やイメージは、制作時に意識されている。それに対して、もう一方の側面である女性のことを意識させる感じについて、調査的説明過程で、なんだろうこう素直に手が伸ばせなくって と語っていることから判断すると、箱庭制作者は制作時には、素直に手が伸ばせないという身体感覚

※2 楠本（2011）の具体例は、本稿とは異なるコアカテゴリー②【内界と構成の交流】内の具体例である。

として捉えられていたことがわかる。そして、調査者の**＜素直に、手が伸ばせないって言うのは、もう少し言うとどんな感覚＞**という質問を受けて、**うーん、なんとなくね、こう（間８秒）なんでしょうね、素直に手が伸ばせない（間７秒）**と、その身体感覚を再度照合した後に、女性のことを意識させる感じが明確になり、語られた。つまり、その鳥の巣から触発された内的プロセスについて、制作時に、少なくとも、素直に手が伸ばせないという身体感覚は存在していた。この過程の場合、その内的意味やイメージを明確に意識することはなくても、ミニチュアによって触発された自己への影響を身体感覚として捉え、鳥の巣を手にとることを留保するという行動をとっていたことになる。鳥の巣を手にとることを留保するという行動を、この時点では、ぴったりだと感じられなかった内的プロセスの現れと考えるならば、鳥の巣を手にとることの留保を巡る一連の内的プロセスや行為は、直観的な意識の表れと解釈することが可能であろう。

説明過程で新たに生起した内的プロセスは、本来であれば、⑦**【「今回の作品」と「説明過程」の交流】**や⑨**【「説明過程」と「セラピスト」の交流】**で取り上げるべきである。しかし、この鳥の巣を巡る調査的説明過程で生まれた箱庭制作者の内的プロセスは、制作時での内的プロセスがどのようなものであるかを吟味する上で重要であるため、本章で検討しておきたい。自己実現や自分の成長との内的意味やイメージと女性のことを意識させる感じを巡る内的プロセスを、「図と地」（Perls、1969、p.73、倉戸、2011、pp.20-21）、「図地反転」（Perls、1973、p.17、倉戸、2011、pp. 20-21）、前概念的体験の観点から検討したい。

Ａ氏第４回ふりかえり面接では、調査的説明過程における上記の会話に関して、以下のように語られた。検討・考察する部分に＿＿＿を付した。［あの時は、あのことを思い出すと、すぐうるうるとくるのはなんでかな。あの時はね。私の声が震えだしたのは自分でもわかって、思わぬところから自分の何か大事なところが明らかになってきたっていう驚きのような、戸惑いのような気持ちもあったんですね］。

調査的説明過程での、本概念の具体例、その後続の会話と第４回ふりかえり面接での会話を総合的に捉えると、鳥の巣に関する箱庭制作者の主観的体験を、「図と地」（Perls、1969、倉戸、2011）という観点から捉えることができる。つまり、箱庭制作時には、自己実現や自分の成長との内的意味やイメージの側面が主に、意識の前景に出ていた（図）と考えられる。しかし、調査的説明過程で、自らが語る中で、また、調査者とやりとりすることを通して、鳥の巣のもう一方の側面である女性のことを意識させる感じが、図となっていく。このように「図地反転」（Perls、1973、倉戸、2011）が起こる。この「図地反転」は、［思わぬところから自分の何か大事なところが明らかになってきたっていう驚きのような、戸惑いのような気持ち］を引き起こさせる、箱庭制作者にとって大きなインパクトを伴った主観的体験であった、と捉えられる。このように、ミニ

チュアを巡る内的プロセスは、集約性をもち、その多様な意味やイメージのうち、ある時にはその一つの側面が図となるが、別の場面では、図地反転が起こり他の側面が図となるという特性をもつ、と捉えられる。図地反転することにより、箱庭制作者は、ミニチュアを巡る自己の多様な意味やイメージに対して、気づきをえることができると考えられる。

また、鳥の巣を巡る感覚について、制作時には、素直に手が伸ばせないという身体感覚として捉えられていたが、調査者の質問を受けて、その身体感覚を再度照合した後に、女性のことを意識させる感じが明確になり、語られたことについて、気づきの観点から検討することができる。ゲシュタルト療法では、気づきには、a.内層、b.外層、c.中間層の３つがあるとする。内層の気づきとは、身体内部で起きていることの意識化、外層の気づきは、身体の外側、外界で起きていることの意識化、中間層の気づきとは内層と外層の中間にあるファンタジーの世界での想像、空想、思い込み、評価、コンプレックスなどの意識化である（Perls、1973、p.79、p.148、倉戸、2011、pp.17-19）。この考えを参照すれば、鳥の巣を巡るＡ氏の主観的感覚は、制作時の内層の気づきであったものが、説明過程で中間層の気づきにシフトしたのだと、解釈することができる。

ここで検討しているＡ氏第４回箱庭制作面接での鳥の巣に関する主観的体験は、弘中（2014）の指摘とも深く関連している。弘中（2014）は箱庭療法など非言語的・イメージ的表現が中心となる面接の治療メカニズムを検討している。その中で、Gendlinの考えを参照しつつ、前概念的体験の重要性について述べている。前概念的体験は情緒性や身体感覚が優位な「！」とでも表されるべき体験であり、箱庭制作はクライエントに言葉では表現し尽せない感情や身体感覚を伴う体験を引き起こす、と指摘している（pp.188-190）。鳥の巣に関するＡ氏の主観的体験は、箱庭制作過程ではでも、なんだろうこう素直に手が伸ばせなくってという身体感覚が優位で、言語化しにくい体験であった。この主観的体験は、前概念的体験であった、と考えることができる。調査的説明過程で、調査者とやりとりする中で、［あの時はね。私の声が震えだしたのは自分でもわかって、思わぬところから自分の何か大事なところが明らかになってきたっていう驚きのような、戸惑いのような気持ちもあったんですね］（Ａ氏第２回ふりかえり面接での語り）と感情が湧き出てくると共に、自分の思わぬところから自分の何か大事がところが明らかになってきたという意識化のプロセスを経ていった。そのような内的プロセスを通して、鳥の巣がすごくその女性のことを（中略）意識させる感じが（中略）私にはあるんですよや特にこれは‘巣を指差しながら’こう子どもをかえすっていうね。（中略）うん私は（中略）子どもがいないというところで（中略）何か引っかかっている様な気も（中略）しますねという意識化、言語化が生じた、と理解することができる。

本項の最後に、［ミニチュアにより喚起される内的プロセス］について、心理

療法における他の概念と比較検討することを通して、本概念の特徴を明らかにする。**［ミニチュアにより喚起される内的プロセス］**とは、ミニチュアがクライエントの内的プロセスを触発し、引き出す役割をなす促進的機能と考えられる。

まず、概念名のうち「内的プロセス」という用語について考える。ミニチュアの治療的要因の一つとして、弘中（2002）は、「ミニチュアがクライエントの潜在的イメージを引き出す役割」を挙げている（pp.84-85）。例えば、A氏第4回箱庭制作面接の鳥の巣に関する具体例にあった、女性のことを意識させる感じは、箱庭制作中には意識化されていなかったため、「ミニチュアがクライエントの潜在的イメージを引き出す役割」に近接した、無意識的要素を含んだ主観的体験と考えられる。ただ、鳥の巣から触発された内的プロセスについて、制作時に、少なくとも、素直に手が伸ばせないという身体感覚は存在していた。この主観的体験の場合、その内的意味やイメージを明確に意識することはなくても、ミニチュアによって触発された自己への影響を身体感覚として捉え、鳥の巣を手にとることを留保するという行動をとっていたことになる。すると、この主観的体験は、より厳密には前概念的体験と考えた方がよいだろう。また、本項のB氏第1回箱庭制作面接の具体例では、イメージの躍動感とミニチュアとの照合がなされ、ミニチュアから喚起されたみすぼらしい感じが明瞭に意識されている。このように本概念の具体例には、明瞭な意識化を伴う例や無意識的な要素を含んだ主観的体験が共にあった。そのため、触発・喚起されるものは「潜在的イメージ」よりも幅広い「内的プロセス」とした方が、本概念の具体例で示された主観的体験のデータに適うと考えた。

次に、概念名のうち「ミニチュアにより喚起される」という部分について考える。岡田（1984）は、箱庭療法のミニチュアについて、「ローエンフェルトが指摘したように、この作品が子供の内的世界を投影しているのも玩具の働きによるからであろう」あるいは「玩具は象徴的意味が投影されやすいと思われる」、と述べている（p.36）。本概念の具体例のデータでも、ミニチュアへの内的世界や象徴的意味の投影という心理的機能に当たると考えられるものも存在する。しかし、上に挙げたB氏第1回箱庭制作面接の具体例のように、投影という無意識的な機制とは捉えにくい例も含まれていた。そのため、「ミニチュアに投影される」とはせずに、より包括的に、「ミニチュアにより喚起される」とする方が適切だと考えた。

本概念を、河合隼雄のいう「外在化されたイメージ」との関連から考えることもできる。河合隼雄（1977）は、こころの中にイメージが存在し、それを表現するのではなく、「最初から、絵画なり箱庭なりを表現の手段として用い、そこに表現したものを頼りにしながら、イメージをつくりあげていくような方法もある」として、それを「外在化されたイメージ」としている（p.39）。また、このようなできる限り自由な表現活動によって、「作っているうちに自分でも思いがけない表現が生じてきたり、作ったイメージに刺戟されて、おもいがけ

ぬ発展や変更が生じたり」する場合があるとしている（河合隼雄、1991、p.26）。このようなことが生じるのは、箱庭作品と制作者との相互作用による効果と考えられる（岡田、1984、pp.19-20、p.36）。木村（1985）も、箱庭制作において、箱庭作品と制作者の相互作用が頻繁に起こることを指摘している。そして、その中で視覚的体験のフィードバックの効果についても触れ、箱庭作品が目に見える形で目前に展開し、極めて具体的な様相を呈することにより、制作者自身がそこから気づくことが多い、と指摘している（p.15、pp.22-23）。さらに、岡田（1984）は、ファンタジーグループのイメージ涌出法に触れ、刺激により、無意識に刺激を与え、無意識からイメージが沸き出てくることを期待するとしている（pp.24-25）。河合の「外在化されたイメージ」に関する記述、岡田や木村の箱庭作品からの作用・フィードバックは、必ずしも、ミニチュアだけを指したものではない。しかし、これらの指摘は、イメージ涌出法の刺激のように、箱庭制作において現物のミニチュアに刺激されて内的プロセスが触発・喚起する様相にも当てはまる、と考えられる。

Ⅳ.「内界」から「装置」への影響の詳細と検討

「内界」から「装置」への影響には、カテゴリー**＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞**、その中に**［自己像としての認識］**、**［ミニチュアの特性が自己の特性でもあるとの認識］**、**［不明瞭なミニチュアの意味や特性］**の３概念があった。

カテゴリー**＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞**は、M-GTAの分析当初は、データに密着して生成された概念であった。そのため、基礎データとしての具体例を内包している。その後、概念相互の関係を検討する中で、**＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞**は、カテゴリーに移行し、**［自己像としての認識］**、**［ミニチュアの特性が自己の特性でもあるとの認識］**、**［不明瞭なミニチュアの意味や特性］**の３概念がこのカテゴリーに包含されることになった[*3]。そのため、ミニチュアに内的プロセスが付与されるという特性においては、カテゴリーおよび上記３概念は共通性をもっている。

しかし、これらの３概念には、意識化の明瞭度に関して、差があった。**［自己像としての認識］**、**［ミニチュアの特性が自己の特性でもあるとの認識］**に関して、箱庭制作者は、その内的プロセスをかなり明瞭に意識化していた。それに対して、**［不明瞭なミニチュアの意味や特性］**では、ミニチュアの意味や特性に不明瞭な部分があった。

以下に、本カテゴリーおよび３概念が、箱庭制作面接の促進機能としてどのような特性をもっているか，詳述・検討していく。

※3 概念生成およびカテゴリー形成に関しては,木下康仁,、『ライブ講義M-GTA ―実践的質的研究法修正版グランウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂,2007の1-15,1-17などを参照されたい。

1）＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞の詳細と検討

（1）－1．＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞の詳細

＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞は、「意図、感覚・イメージ・感情、連想、意味という内的なプロセスがミニチュアに対して付与される様」と定義された。以下にその具体例を挙げる。

＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞の内、制作者の「意図」が表現された主観的体験に関する具体例を挙げる。第６回箱庭制作面接でＡ氏は、島の下方、砂箱手前側に、インパラを置いた（写真４）。そのインパラについて、自発的説明過程で以下のように語った。自分の乗り物として＜はぁ、ペンギンが？＞えぇ、置きました。え、あの、仲間と言うか子分と言うか、乗っけてもらって移動する＜なるほど＞ものですね（Ａ氏自発、6-12）。Ａ氏には、インパラを自己像であるペンギンの乗り物、仲間、子分を表すものであるとの明確な意図があったことがわかる。この語りには、置きましたとの構成に関する語りがある。しかし、語り全体の文脈を考えたとき、この語りを、インパラというミニチュアに、ペンギンの乗り物、仲間、子分という内的プロセスを付与した様であると理解することが適当であると考えた。それは、この語りが、インパラの位置や方向などの構成に関する要素についての語りではなく、インパラというミニチュアに付与されたペンギンとの関係性についての語りであると考えられたためである。

＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞の内、制作者の「意味」が表現された主観的体験に関する具体例を挙げる。第２回箱庭制作面接で、Ａ氏は、砂

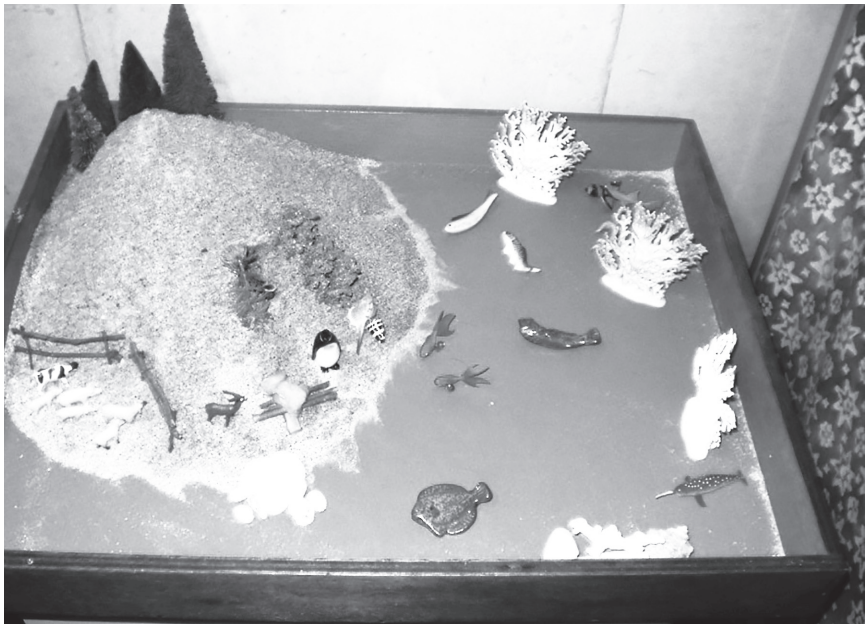

写真4　A氏第6回箱庭作品

箱左上隅に白い石を二個置いた（写真５）。内省報告に、石の意味が以下のように記述された。石は「かたまり」。自然の造形物だけれども、生命感は薄くて、動き出すことがないもの。私が左側に置きたかったいのちとは、そのようなものだったのではないか。はっきりとした形をまだ持たない、抽象的なものがよかったのだと思う（Ａ氏内省、2-11、制作・意味）。石に、生命感は薄くて、動き出すことがないもの、はっきりとした形をまだ持たない、抽象的なものなど多様な意味が付与されていた。

以下の具体例には、やや複雑な内的プロセスが表現されている。第２回箱庭制作面接で、Ｂ氏は砂箱中央に仕切りを、左右をへだてるように置いた（写真６）。「心苦しい思いを表現する仕切りを見つける」とＢ氏が名づけた箱庭制作過程に関して、何か重いものを感じて蓋がされた感じ（Ｂ氏内省、2-1、制作・感覚）、壁（Ｂ氏内省、2-1、制作・連想）気持ちを重たくさせる重さを表現したい（Ｂ氏内省、2-2、制作・意図）、という主観的体験を内省報告に記した。第２回ふりかえり面接では、この内省報告に関して、以下のように語られた。以下に検討する部分に____を付した。[重いものを感じて、気持ちに蓋をされたような感じというのがあって。（中略）仕切りを見つけて、そのものはどういうものなのかっていうのを、なんか、そこから掘り起こすようなものが始まっていました。その仕切りということで、蓋や壁や仕切り、見えない壁みたいな。そういったものを、手にとることになりました。＜ここは、さきほどおしゃってくださったような「何か重いものを感じて、蓋がされた感じ」っていうのに、わりとぴったりな仕切りだった＞そうですね]。つまり、Ｂ氏は、まず、自ら

写真5　A氏第2回箱庭作品

写真6　B氏第2回箱庭作品

の内面に、重いものを感じて、気持ちに蓋をされたような感じを感じた。仕切りが見つかり、それが、どういうものなのかっていうのを、なんか、そこから掘り起こすような内的プロセスによって、仕切りは、気持ちを重たくさせる重さを表現したいという意図、何か重いものを感じて蓋がされた感じという感覚やイメージ、壁という連想という内的プロセスを付与するのにぴったりなミニチュアであることが確認された、と捉えられる。

（1）－2．＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞の検討

本カテゴリーの具体例を検討することを通して、**＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞**がどのような促進機能をもつのか、見出していきたい。

結論を先取りすると、本カテゴリーの具体例は、箱庭制作者に明瞭に意識化された主観的体験であった。付与されるものが、意図や意味であるならば、それが意識的なプロセスであることは自明である。しかし、それ以外の感覚・イメージ・感情、連想に関しても、それらの内的プロセスをミニチュアに付与するという過程を、箱庭制作者が意識的に行っていることが示された。このようになった理由は、以下のように考えられる。先に述べたように、本カテゴリーは、分析の途中までは、データにより生成された概念であった。そのため、その定義に従って、内的プロセスがミニチュアに付与される様が、明確に語られた具体例から、概念が生成された。それゆえ、本カテゴリーには、必然的に意識化の明瞭度の高い具体例が多く含まれることになった。別に、内的プロセスをミニチュアに付与していると捉えられるものの、その意識化の明瞭度の低い主観的体験は、**［不明瞭なミニチュアの意味や特性］**の具体例となった。

このような箱庭制作者の意識的な体験をどのように捉えることが適切だろうか。例えば、A氏第６回箱庭制作面接において、自分の乗り物として＜はぁ、ペンギンが？＞えぇ、置きました。え、あの、仲間と言うか子分と言うか、乗っけてもらって移動する＜なるほど＞ものですね（A氏自発、6-12）という主観的体験があった。この主観的体験は、本カテゴリーの特性をよく表していると考えられる。この主観的体験は、現物のモノであるインパラというミニチュアを、自分の乗り物として、見たてている、見なしている、と捉えることができる。これは、子どものごっこ遊びと同じ心の機能といえる。人形を親や自分にみたてた遊びを通して、子どもは内的ストーリーを表現する。この、現物のモノを○○として見たてる、見なすという内的プロセスが、箱庭制作面接でも生起している、と考えることができる。この見たてる、見なすという心理的機制は、投影と類似点があるもの、異なった点をもつと考えることができる。本具体例は、投影とは異なり、そのプロセスが明瞭に意識されている。この点に両者の差異がある。しかし、この両者は、モノと内的なプロセスが重なりあい、＜こころのこと＞となるという点では共通しており、箱庭制作面接における促進機能の一側面と考えることができる。

＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞に見いだされた箱庭制作者の意識的な体験の促進機能について、別の観点から検討したい。例えば、第２回箱庭制作面接で、A氏は、砂箱左上隅に白い石を二個置いた。その箱庭制作過程について自発的説明過程で、そういうちょっと意味の分からないものが置きたかった（A氏自発、2-11）と語った。この時点では、石は、意味の分からないもの、と箱庭制作者に意識されていた。そして、内省報告には、石に、生命感は薄くて、動き出すことがないもの、はっきりとした形をまだ持たない、抽象的なものなど多様な意味が付与されていたことが記された。これらの具体例を時系列的に見ていくと、箱庭制作過程においても一定の意識化がなされているが、内省によって、石というミニチュアに付与された内的意味がより明瞭に意識化されていったことがわかる。

この検討を深めるために、石とその内的意味について、A氏第２回箱庭制作面接における他のミニチュアや構成についての主観的体験も含め、検討する。A氏第２回箱庭制作面接では様々な様相の命が構成された。石は、A氏第２回箱庭制作面接のいのちというテーマに関する重要なミニチュアの一つであった。箱庭制作者は「生命のない大地がおそろしい」と感じていた（A氏内省、2-3、制作・感覚）。制作者はこの土地に命を必要としていると考えられる。A氏は、箱庭制作過程12で、棚に青い鳥を見つけて、白い石の上にのせた。青い鳥を見つけるまで、A氏は苦しさを感じていた。ところが青い鳥がたまたま目に入った時、「ああ、これだ」と感じた。そして、それを置くことで、苦しさがなくなった。青い鳥は、意図を超えているような感じもあり、箱庭や自分の心の調子を変える大きな影響を及ぼしたことが示された。そして、もう少し

命を感じたいと思った制作者は、鴨を見つけ置くことができた。A氏は、土偶や埴輪が半分いのちではないもの、人間ではない神様の方に近い存在、信仰の対象になるお山のふもとの番人であるとも感じていた（p.158参照）。

A氏第２回箱庭制作面接には、まだ形をもたない抽象的な命（石）、生命感を感じさせる命、半分命ではない神様に近い命というように、命の多様な様相が表現されており、この回の作品の主なテーマは命であると捉えられた。そのようなテーマの中で、石は、命の表現なのであるが、生命感は薄くて、動き出すことがないもの、はっきりとした形をまだ持たない、抽象的なものという、常識的な命のイメージを超えた独特の意味が付与されている。このように石は、A氏第２回箱庭制作面接のテーマを構成する重要なミニチュアの一つであった。また、命が主なテーマとなったA氏第２回箱庭制作面接は、A氏の10回に亘る箱庭制作面接全体のテーマの一つである、宗教性（命、守り、神聖な場所・生き物）に関する面接の展開において重要な回でもあった。

以上、確認してきたように、A氏第２回箱庭制作面接において、石に付与された内的プロセスは、箱庭制作過程においても一定の意識化がなされているが、語りや内省によって、さらに明瞭に意識化されるという過程を経たものであった。そして、石はA氏第２回箱庭制作面接における重要なテーマを構成するミニチュアの一つであった。**＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞**は意識的なものであるが、そうであるからといって一概に箱庭制作面接において、意義の小さい内的プロセスとはいえない、と考えられる。

さらに、**＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞**の箱庭制作面接における意義について、イメージの特性の面から検討する。Jung（1921）は、イメージ関して以下のように定義している（pp.447-448）。

> 内的イメージは、さまざまな由来をもつ多種多様な素材から構成された、複合体である。ただし、これは寄せ集めではなく、それ自体でまとまりを持った産物であり、それ自身の独立した意味を備えている。イメージは心の全般的状況を凝縮して表すものであって、単に・あるいは主として・無意識内容だけを表すものではない。たしかにそれは無意識内容を表しているが、しかしそのすべてを表しているわけではなく、その時々に布置されている内容だけを表している。この布置は一方では無意識の独特の活動によって生じ、他方ではその時々の意識状態によって生じる。この意識状態はつねに識閾下にある素材のうち関係のあるものの活動を促すと同時に、関係のないものを抑制する。したがってイメージはその時々の無意識の状況と意識の状況を表している。それゆえあるイメージの意味を解釈することは、意識と無意識のどちらかのみから出発するのではなく、両者を互いに関連させることによって初めて可能になる。

このようにイメージは、意識と無意識との両方からの影響を受け、その心の全般的状況が凝縮されたものである。そして、その時々に布置された内容だけを表すとされている。また、箱庭制作は、意識と無意識とが相互に作用しあう、意識と無意識の協働作業である。**＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞**は、イメージの、あるいは意識と無意識の協働作業の、意識的側面により比重のある主観的体験についてのカテゴリーであるといえよう。

箱庭療法において、意識が勝ちすぎることの弊害が指摘される場合がある（河合隼雄、1991、pp.132-134;他）。**＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞**に示された、意識的な過程が強く働いて作られた箱庭作品は、意識が勝ちすぎたものとなる危険性をはらんでいるとも考えられる。そのため、**＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞**に示された箱庭制作者の主観的体験について、さらに吟味する必要がある。箱庭制作が意識と無意識との協働作業となるためには、このカテゴリーで示された特性とは異なる、＜もの＞から＜こころのこと＞になっていく過程も必要になると考えられる。この点については、別に検討する。

ここでは以下のことを指摘するにとどめる。本カテゴリー内の具体例には、内的プロセスをミニチュアに付与する過程の前後に、別の内的プロセスが存在し、それらが連動している場合があった。例えば、第２回箱制作面接でＢ氏は、仕切りを砂箱中央に左右をへだてるように置いた。これらの主観的体験について、第２回ふりかえり面接での語りと総合して、検討する。Ｂ氏は、内面に、重いものを感じて、気持ちに蓋をされたような感じをキャッチした。そして、それらに基づいてミニチュアを探し始めた。仕切りを見つけた後、それはどういうものなのかを掘り起こす内的作業を行った。仕切りは、何か重いものを感じて蓋がされた感じという感覚やイメージ、壁という連想、気持ちを重たくさせる重さを表現したいという意図が付与するのに、ぴったりなミニチュアであった。これは、仕切りというミニチュアと、そのミニチュアによって自分の心の中に触発される内的プロセスとを照合する内的作業について語っている、と考えられる。このように、今自分に生じている内的プロセスのキャッチ、それらを付与できるミニチュアを探すという行為、さらにミニチュアと内的感覚の照合、ミニチュアへのイメージの付与という複合的な内的プロセスが報告された。そのような複合的プロセスによって、ぴったりなミニチュアが選択され、それ用いた構成を可能にした、と考えることができる。このような複合的な内的プロセスは、＜もの＞から＜こころのこと＞になっていく過程の一様相であると考えられる。**＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞**に示された内的プロセスにおいて、このような複合的な内的プロセスが基礎となっている場合には、箱庭作品が、意識が勝ちすぎたものとなる危険性は軽減する、と考えられる。

2）［自己像としての認識］と［ミニチュアの特性が自己の特性でもあるとの認識］の詳細と検討

（1）－1．［自己像としての認識］と［ミニチュアの特性が自己の特性でもあるとの認識］の詳細

＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞内の［自己像としての認識］について詳述する。［自己像としての認識］は、「あるミニチュアを自己像と認識すること、また、そのミニチュアが自己像として選ばれた要因」と定義された。以下に具体例を示す。

Ａ氏の第３回箱庭制作面接では、砂箱奥中央に沖に向かう亀が置かれた（写真７）。その亀について、Ａ氏は、調査的説明過程で以下のような主観的体験を語った。１回目のイルカが亀になったなっていう感じ（中略）そっちの方が、イルカ、ま、イルカは、ま、私だったんですけどね、前も。これも亀は私だろうなと思いますけど、このほうが等身大の感じがして、はぁ、ぴったりきます（Ａ氏調査、3-13）。Ａ氏は、亀が自己像であると語った。そして、第１回箱庭制作面接でのイルカ（自己像）が亀になった感じであり、今回は亀の方が等身大の感じすると、以前の作品との関連を語った。

Ｂ氏第８回箱庭制作面接では、砂箱左側に船出しようとしている船と、砂箱中央左寄りに頭をかく人形と、天使に導かれる子どもが置かれた（写真８）。それらのミニチュアについて、Ｂ氏は、この船と（Ｂ氏自発、8-1）この人形と（Ｂ氏自発、8-18）このまあ、ここでは子どもなんですけど、人、人は、（Ｂ氏自発、8-19）今のその、自分の、その、自画像っていうか、そのようなところがあって（Ｂ氏自発、8-複数過程に亘って）と語った。船、ルーペを覗く頭をかく人形、天使に導かれる子どもが自己像として認識されていた。

＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞内の［ミニチュアの特性が自己の特性でもあるとの認識］について詳述する。［ミニチュアの特性が自己の特性でもあるとの認識］は、「あるミニチュアの特性や要素が、自己の特性でもあり、自分の中にもあるとの認識」と定義された。以下に具体例を挙げる。

Ａ氏は第３回箱庭制作面接で、海に、サメ（砂箱右上）やシャチ（砂箱中央右寄り）を置いた。それらのミニチュアについて、調査的説明過程で、食物連鎖でいうと上のほうになると思うんですけど、割と、＜そうだね、そうだね＞そんなの意識して、＜はぁん＞海にもいるし、＜ふうん＞私の中にもあるしと思って、いますね（Ａ氏調査、3-11）という主体的体験を語った。サメやシャチは、海にいると同時に、自分の中にもある。そして、それらは、食物連鎖の上にいるという特性をもっていることが語られた。

（1）－2．［自己像としての認識］と［ミニチュアの特性が自己の特性でもあるとの認識］の検討

＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞内の［自己像としての認識］と［ミニ

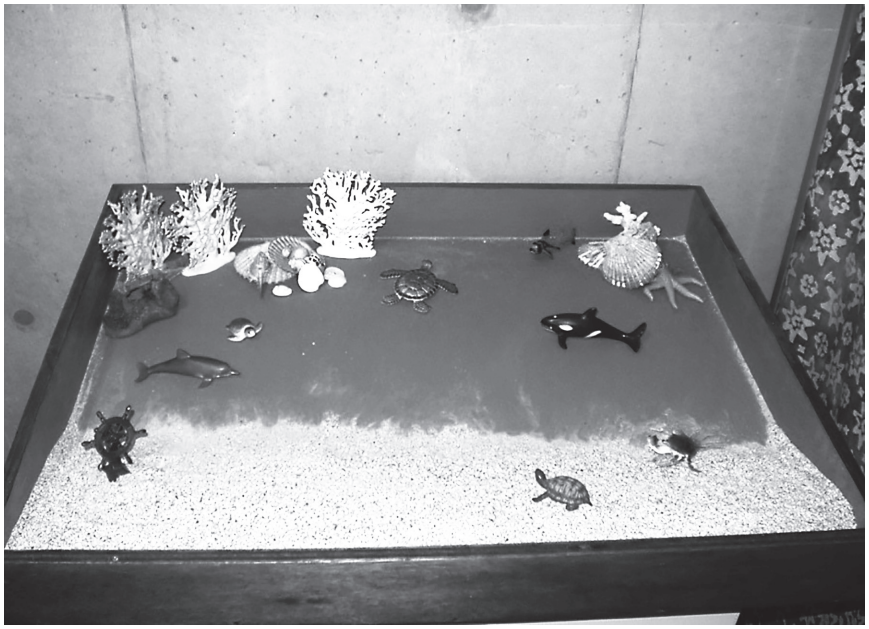

写真7　A氏第3回箱庭作品

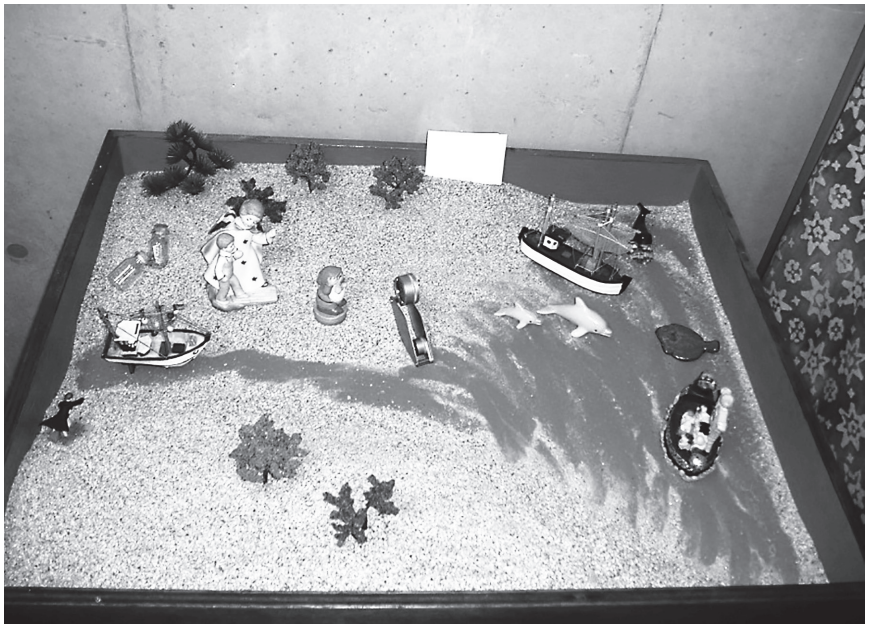

写真8　B氏第8回箱庭作品

チュアの特性が自己の特性でもあるとの認識］の両概念について、検討していく。

［自己像としての認識］は、ミニチュアに内的プロセスを付与する心の動きの一例であるため、本カテゴリー内の概念とした。そして、［自己像としての認識］は、両氏の語りに頻出するとともに、A氏の単一事例質的研究で示されたように、自己像の変遷が箱庭制作者の心や箱庭制作面接の展開に重要な意味をもったため（楠本, 2013）、独立した概念として生成することとした。例えば、A氏第３回箱庭制作面接の亀は自己像であった。第１回箱庭制作面接でのイルカ（自己像）が亀になった感じとともに、今回は亀の方が等身大の感じがした。この具体例にもあるように、自己像の変化には、自己イメージを巡る内的プロセスが深く関与している。

B氏の第８回箱庭制作面接では、船と頭をかく人形と天使に導かれる子どもが自己像として認識されていた。このように、一つの箱庭作品の中に、複数の自己像が置かれる場合がある。そして、船は船出していく自己イメージであり、ルーペを覗く頭をかく人形は困ったことになったなーという自分自身であり、子どもは天使に導かれる自己イメージと、それぞれのミニチュアには、自己の異なるイメージが付与されていた。河合隼雄（1969）は、箱庭表現における自己像の問題は複雑であるとする。自己像には、意識的に明確に把握されたもの、理想像や未来像、無意識的に生じてくる面などを含む場合があり、また、それらが関連しているために複雑になるとする（p.42）。［自己像としての認識］は、意識的に明確に把握された、現在の自己イメージや未来像についての主観的体験と考えることができる。

［ミニチュアの特性が自己の特性でもあるとの認識］は、［自己像としての認識］と類似の概念であるが、［自己像としての認識］が、より全体的な自己イメージが付与されているのに対して、［ミニチュアの特性が自己の特性でもあるとの認識］は、自己のある特性や自己の感情・感覚といったより部分的な要素がミニチュアに付与されていた。例えば、A氏第３回箱庭制作面接で、サメやシャチは、海にいると同時に、自分の中にもあるものだった。そして、それらは、食物連鎖の上にいるという特性をもっていた。この箱庭制作過程について、自発的説明過程では以下のように語られた。この辺の生き物たちは全部こう海の中でこうゆらゆら泳いでいるっていうか、何気なーい風に、置いたつもりなんですけど（A氏自発、3-11）。つまり、サメやシャチは、まさに海の生き物として認識されていた。この具体例では、サメは自己と同一化して捉えられているのではなく、その特性はサメにも自分にもあるとして、別箇の存在でありつつ、共通性をもつものとして、箱庭制作者に捉えられている。このように、［ミニチュアの特性が自己の特性でもあるとの認識］の場合、ミニチュアは自己と同一視されない。［ミニチュアの特性が自己の特性でもあるとの認識］は、様々な側面をもつ自己像のうち、自分の中のある部分的側面が意識化された場合の

主観的体験を示しているものと考えられる。

すると、［自己像としての認識］の内、一つの箱庭作品の中に、複数の自己像が置かれる場合と、［ミニチュアの特性が自己の特性でもあるとの認識］とでは、どのような違いがあるのだろうか？［自己像としての認識］の具体例として挙げた、Ｂ氏第８回箱庭制作面接の主観的体験は以下のようなものであった。一つの箱庭作品の中に、複数の自己像が置かれた。船は船出していく自己イメージであり、頭をかく人形は困ったことになったなーという自分自身であり、子どもは天使に導かれる自己イメージと、それぞれのミニチュアには、自己の異なるイメージが付与されていた。この具体例に後続して、自発的説明過程で以下のように語られた。検討・考察する部分に＿＿＿を付した。先に何があるのかなとかっていうところを、のぞき見るっていうところなんだけども、（Ｂ氏自発、8-15）やああ、困ったことになったなーという自分自身もあるし、（Ｂ氏自発、8-複数過程に亘って）あの、まあ、あの、心配せずに、あの、まあ、どう言えばいいんでしょう。導かれるままに行きなさいっていうような、あの、そういったものも感じるしっていう中で。（Ｂ氏自発、8-19）（中略）まあ、こっちの出ていくのは自分だけではなく、他の、あの、いろんな方も、あの、居てっていう感じで（Ｂ氏自発、8-25）。具体例と後続する語りのデータから推察されるのは、Ｂ氏にはルーペを覗き見る頭をかく人形も天使に導かれる子どもも船も、自分自身の姿としてイメージされているということである。頭をかく人形を選び、置いた時には、そのようなしぐさをしつつ困っている自分がイメージされた。天使と子どもを選んだ時には、導かれるままに行きなさいと語りかけられている自分がイメージされたのであろう。船を選んだ時には、出帆する自分がイメージされた。このような意味では、それぞれのミニチュアは、確かに自分の異なる状況を示しているが、同時に、一人の人間としての全体性をもった自分自身の体験をイメージ化したものである、と考えることができるだろう。

それに対して、［ミニチュアの特性が自己の特性でもあるとの認識］の具体例Ａ氏第３回箱庭制作面接での主観的体験では、サメやシャチは、まさに海の生き物として認識されていた。この点が、上に挙げたＢ氏の第８回箱庭制作面接の具体例との違いである。

つまり、Ｂ氏の第８回箱庭制作面接の具体例では、それぞれのミニチュアは自分自身であったが、Ａ氏第３回箱庭制作面接の具体例では、あくまでもミニチュアは自分とも共通する特性をもった海の生き物なのである。ここに両概念の差異が認められる。

３）［不明瞭なミニチュアの意味や特性］の詳細と検討

（１）－１．［不明瞭なミニチュアの意味や特性］の詳細

＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞内の［不明瞭なミニチュアの意味や特性］について詳述する。［不明瞭なミニチュアの意味や特性］は、「ミニチュアの意味や特性が、箱庭制作者自身にとって不明瞭である様」と定義された。

以下に具体例を示す。

Ａ氏は、第３回箱庭制作面接で、砂箱右上隅に、貝殻で半身が隠れるようにタコを置いた。内省報告に、タコについて、以下のような主体的体験が記述された。タコは、私にとって、人目にさらしたくない私自身のある側面なのかもしれない。できれば本当は自分でも気がつかずにいたい。でも、確かにあると認めざるを得ない自分の中の欲求や傾向。そんなものが自分の中に確かにあると気がついていながら、しかも、時に半身さらすような状態でいながら、あえて見ないようにしている。それが何なのか、その全体像を私自身把握できていないから、言葉にならないのかもしれない（Ａ氏内省、3-10、自発・意味）。Ａ氏にとって、タコは意味が把握しがたい、不明瞭な特性をもったミニチュアである。いくつかの推測はできるのだが、タコがもつ自分にとっての意味の全体像を自分自身が把握できていないために、言語化・意識化が難しいのかもしれないと考えていることが示された。

Ｂ氏第４回箱庭制作面接では、砂箱中央に赤い橋が置かれた（写真９）。調査的説明過程で、調査者の**＜この中で、現実の風景とは違うなというところはありますか＞**という質問に対して、Ｂ氏は、以下のように語った。今も、今、ちょっと質問受けて、改めて、どうしてだろうとかって思ったのは、なんで赤い橋を選んだのか、っていうのが。実際には、普通の、ありがちな、コンクリートステンの支柱で作られた橋なんだけども、最初、橋もってきた時に、この赤の、この橋っていうのが、その、気になったというか。印象に残って。で、まあ、あの橋があるんだけども。なんで、この赤の橋。現実とは全然違うな。なんで

写真9　B氏第4回箱庭作品

だろうっていうのは、私もわからないでいますね。（中略）大きさ的にも、まあ、この大きさがしっくり来てて。でも、この赤の色のこの、やつに実際自分自身が動いてたっていうのは確かなんです。＜そうなんですね。なかなかちょっとどういう動きかは言葉にしにくいけれど、確かになにか動いてた、という感じなんですね。＞はい（Ｂ氏調査、4-4）。Ｂ氏は、現実の風景の中にある橋とは違う赤い橋を選んだことに対して、それがなぜなのか、わからないと語った。しかし、同時に、大きさがしっくりきたことや、この赤い橋に制作中自分の心が動いたことが確かだと認識している。この橋を選んだ内的プロセスの一部は意識されており、一部は不明瞭で意識化・言語化し難いことが語られている。

（１）－２．［不明瞭なミニチュアの意味や特性］の検討

＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞内の［不明瞭なミニチュアの意味や特性］について検討する。

この概念は、＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞、［自己像としての認識］、［ミニチュアの特性が自己の特性でもあるとの認識］とは異質の側面をもつ。ある種の内的プロセスがミニチュアに付与されている点では、上記カテゴリー・概念と本概念とでは、共通点をもつ。しかし、上記カテゴリーや概念は、その内的プロセスが明瞭に意識化されていたのに対して、本概念では、ミニチュアの意味や特性に不明瞭な部分が残る。Ａ氏第３回箱庭制作面接の内省報告には、タコは、私にとって、人目にさらしたくない私自身のある側面なのかもしれない。（中略）それが何なのか、その全体像を私自身把握できていないから、言葉にならないのかもしれない（Ａ氏内省、3-10、自発・意味）とある。Ａ氏は、タコに、自分の人目にさらしたくない部分を付与したのだろうと考えつつも、同時にその全体像を把握しきれていない状態をも報告している。Ｂ氏第４回箱庭制作面接における橋についての具体例では、大きさがしっくりしたことは明瞭に把握されている。しかし、このミニチュアにより、自分の心が動いたことは把握されていたが、その内実は明瞭ではなく、なぜ、このミニチュアを選んだのか、自分自身でもわからなかった。この概念は、ミニチュアに意味を付与する際、部分的な意識化が伴うという過程を示している、と考えられる。逆の方向から言えば、ミニチュアを手に取ったり、置いたりする過程において、無意識的な要因が作用してその過程が進められ、その内の一部の内的プロセスが部分的に意識化されるという様と考えられる。この概念は、箱庭制作面接における意識と無意識との関係性の一様態を示している。

本概念を直観的な意識の観点から考察することもできる。直観的な意識とは、「意味の認知は伴わないが、ぴったりだと感じることができる意識」である（楠本、2011、p.113）。上に挙げたＢ氏第４回箱庭制作面接の橋についての具体例では、大きさがしっくりきた上に、ミニチュアに自分の心が動かされる、という主観的体験が語られていた。このように直観的な意識に従って赤い橋のミニチュアを選択し、構成したため、Ｂ氏は現実の風景を意識して構成した作品の

中で、現実とは異なる赤い橋を選んだ理由を明瞭に意識化し、言語化することができなかったのだ、と捉えることができるだろう。

＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞に関する検討の中で、**＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞**に示された、意識的な過程が強く働いて作られた箱庭作品は、意識が勝ちすぎたものとなる可能性をはらんでいることに触れた。そして、このカテゴリーで示された特性とは異なる、＜もの＞から＜こころのこと＞になっていく過程に関して、別に検討する、とした。**［不明瞭なミニチュアの意味や特性］**は、ミニチュアに意味を付与する際、部分的な意識化が伴うという過程、と考えられた。また、直観的な意識の観点からも検討した。**＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞**の具体例は、意識と無意識の協働作業の意識的側面により比重のある主観的体験であった。それに比べ、本概念は、無意識的な内的プロセスにより比重のある主観的体験の一様相である、と考えられる。

Ⅴ.「内界」と「装置」との双方向の影響の詳細と検討

「内界」と「装置」の双方向の影響について詳述する。「内界」と「装置」の双方向の影響には、**［ミニチュアの多義性］**、**［イメージや感覚をミニチュアで表現する困難］**の２つの概念があった。これらの概念には、内界から装置への影響と、装置から内界への影響の双方向の影響関係が見いだされた。以下に具体例を挙げ、これらの概念が、内界から装置への影響と、装置から内界への影響の双方向の影響関係と考えた根拠を示す。

［ミニチュアの多義性］の具体例に以下のような箱庭制作者の主観的体験があった。Ａ氏第２回箱庭制作面接で、砂箱左上に置かれた土偶や埴輪について調査的説明過程で、なんか、いのちなんだけど、いのちを持ってる人として持ってきたんですけどね＜ふんふんうん＞半分いのちじゃないものだっていっていうか（中略）人間ではないいのちになってるというか＜ふんーん＞そういう感じがして（Ａ氏調査、2-11）という主観的体験が報告された。いのちを持ってる人として持ってきたんですけどねは、２）の内界→装置の影響であり、内的プロセスをミニチュアに付与する様相であると考えられる。ところが、半分いのちじゃないものだっていっていうか（中略）人間ではないいのちになってるというか＜ふんーん＞そういう感じがしては、１）の装置→内界への影響であり、ミニチュアにより喚起される内的プロセスと捉えられる。このように、一つのミニチュアに対して、１）と２）の両方の方向性をもった内的プロセスがともに生起している。ミニチュア⇔内界という双方向の影響関係となっている。

また、**［イメージや感覚をミニチュアで表現する困難］**の具体例に以下のような箱庭制作者の主観的体験があった。Ｂ氏は第１回箱庭制作面接で、砂を掘り、砂箱の底の青い色を利用して、砂箱中央に水の表現を行った。その表現を巡って、調査的説明過程で、１）と２）の両方の方向性をもった語りがあった（pp.136-137参照）。この制作過程についての語りの内、実際にそれを表わすの

に、十字架を置くとか、マリア像を置くかというと、それには、抵抗があったわけです の部分は、制作者にとって大切な宗教的イメージを、ミニチュアでは表現できない感覚について語っている。つまりこれは、内的イメージをミニチュアに付与することへの抵抗感であり、２）の内界→装置の方向性に関する言及であると考えられる。しかし、こんこんとわき出るような躍動感とかいう意味でなんか、表わすにはちょっとみすぼらしすぎる は、ミニチュアにより喚起されたみすぼらしすぎるという感覚であり、１）のミニチュア→内界の方向性に関する言及であると考えられる。この具体例もまた、一つのミニチュアに対して、１）と２）の両方の方向性をもった内的プロセスがともに生起している。

このような具体例を根拠として、**[ミニチュアの多義性]**、**[イメージや感覚をミニチュアで表現する困難]** は、3）内界と装置との双方向の影響の概念だと考えた。

１）［ミニチュアの多義性］の詳細と検討

（１）－１．［ミニチュアの多義性］の詳細

［ミニチュアの多義性］ は、「ミニチュアの象徴的意味やイメージが多義的であること」と定義された。ただし、この概念の中には、タイプの異なる具体例があり、１．イメージの集約性、２．箱庭制作者とミニチュアとの関係性における多義性、３．普遍的な意識としての両義性、４．ミニチュアのイメージや意味が複数の可能性をもつ状態、の４タイプにわけることができると考えられた。

１．イメージの集約性

１では、ミニチュアの意味やイメージが多義的であった。その具体例を挙げる。Ａ氏第１回箱庭制作面接では、ミニチュアを探す中で、天使を一旦手に取るが、棚に戻すという行為が見られた（写真10）。天使に関して、内省報告で、以下のように記された。船の代わりだったけれど、「天使」であることも重要だった。何か聖なるものがよかったのだと思う。白い鳥ではいけないし、白いウルトラマンでもいけない。神の使いという要素が私の心に響いていた。だから、俗世間的なものではいけなかったのだと思う （Ａ氏内省、1-6、調査・感覚）。天使は、神の使いという聖なるものという特性と、船の代りとして、進んでいくという特性の両方を兼ね備えたミニチュアであることが示された。

第２回箱庭制作面接で、Ａ氏は、砂箱左上に土偶や埴輪を置いた。土偶や埴輪は、いのちなのだが、半分いのちではないものでもあり、人間ではないいのちになっているというように、多義的なイメージをもったミニチュアであることが語られた（p.158参照）。上記の２具体例では、ミニチュアの意味やイメージの多義性が示された。

２．箱庭制作者とミニチュアとの関係性における多義性

２．箱庭制作者とミニチュアとの関係性における多義性が見いだされた。以下に具体例を挙げる。第１回箱庭制作面接でＡ氏は、棚に置かれた鳥の巣を手にとり、12秒ほどじっと見るが、それを選ばず、棚に戻した。その卵が入った鳥の巣について、内省報告に、自分は巣の中で守られているような気もするし、

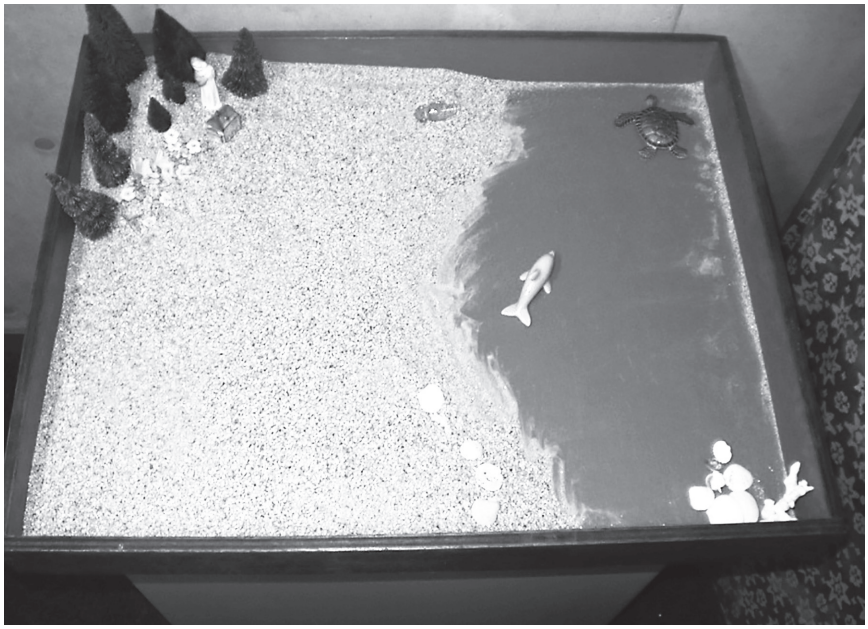

写真10　A氏第1回箱庭作品

巣を守っている存在のようにも感じる（A氏内省、1-1、制作・感覚）と記した。制作者自身と鳥の巣というミニチュアとは、守り・守られるという両方の意味がともにあてはまるような関係であることが示された。この具体例の場合，守られるという感覚は，鳥の巣の中にある卵のことをを指している、と捉えられた。この具体例では、箱庭制作者とミニチュアの関係性についての多義性であった。

3．普遍的な意識としての両義性

３では、１に比べて、両義的・多義的なミニチュアであることが箱庭制作者にかなり明瞭に意識化され、意図的に選択しようとしている。その具体例を以下に挙げる。第５回箱庭制作面接で、Ａ氏は、棚に蛇を探した（写真11）[※4]。その行為に関して、自発的説明過程では、白蛇を探していたこと、それは、神的なものの象徴であると語った。そして、調査的説明過程で、鳥居を置いてから、もう蛇のイメージが出てきていて、（中略）＜その中でも、うーん、こういう神様とかってある？＞（間10秒）賢さと、おろかさの象徴のような（A氏調査､5-8）と語った。また､内省報告では､蛇には善悪両方のイメージがあって、賢さを象徴しているとしたらその反対はおろかさになると思った（A氏内省、5-8、調査・意味）と報告された。Ａ氏は、蛇に対して神的なイメージをもち、さらにそれは、善と悪、賢さとおろかさという両面性をもつことを、比較的明瞭に意識していたことが報告された。

※4 蛇は砂箱には、置かれなかった。

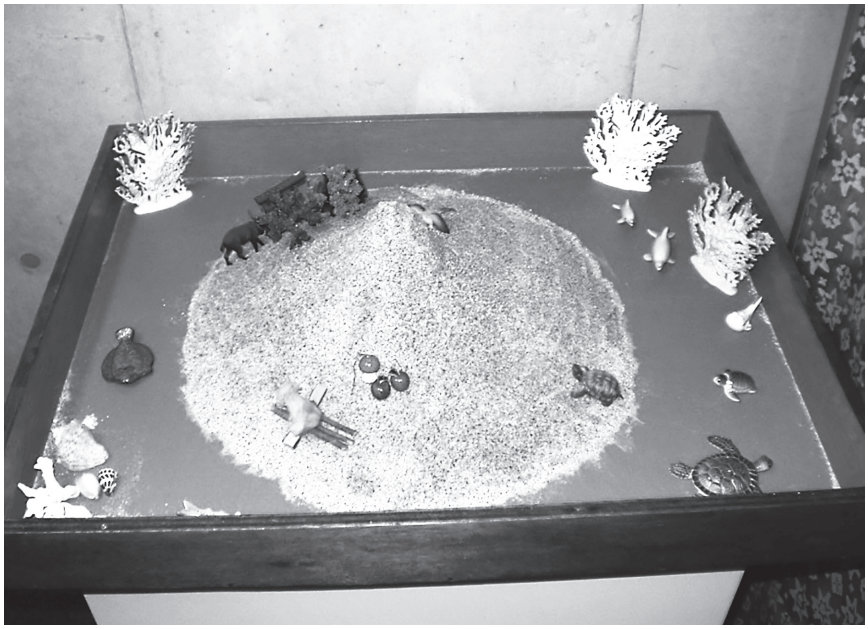

写真11　A氏第5回箱庭作品

4．ミニチュアのイメージや意味が複数の可能性をもつ状態

4では、ミニチュアの様態や感覚が、一つに定まらない主観的体験が語られた。第1回箱庭制作面接で、A氏は、砂箱左奥隅にマリア像と教会を置いた。それらのミニチュアの色に関して、内省報告で、ちょっと、遠くにあるのかおごそかな感じなのか。ああいう白っぽいのや青いのが、いい色だなと思って（A氏自発、1-10）と語った。マリア像や教会の色について、それが距離感に由来するのか、おごそかさというミニチュアの特性に由来するのか、明確には把握できていないと推測できる語りである。そのミニチュアを巡って、内省報告に、箱庭制作中には、私の現実の世界は、かすんでしまうほど遠くなっているのかもしれない。それとも、私自身がいつも心の世界に親近性があり、現実世界から距離があるのか？（A氏内省、1-10、自発・意味）と記した。遠くにあるという距離感に関して、箱庭制作中の意識のあり様と、自己の心の特性の両観点から捉えようとしていることが示された。しかし、この点においても、曖昧さが残る記述となった。

4は、ミニチュアの多義性に関して、あいまいさや矛盾を含んだ主観的体験となっている。

（1）－2．［ミニチュアの多義性］の検討

この概念には、特性の異なる4つのタイプがあると考えられる。以下に、タイプごとに検討する。

1．イメージの集約性

1では、ミニチュアの意味やイメージが多義的であった。1は、イメージ

の集約性に関する主観的体験が示されていると考えられる（河合隼雄、1969、pp.17-18）。Ａ氏第１回箱庭制作面接の天使は、神の使いという聖なるものという特性と、船の代りとして進んでいくという特性の両方が集約されていた。Ａ氏第２回箱庭制作面接の土偶や埴輪には、土偶や埴輪は、いのちをもっている人、半分いのちではないもの、人間ではないいのちになっている存在というように、いのちを巡る多義的なイメージが集約されていた。河合隼雄（1967）は、イメージの特性の一つとして、集約性を挙げ、一つのイメージが、それを取りまく様々な感情を伴って、多くの事柄を集約している例を挙げている（pp.117-119）。１は、河合が述べるイメージの集約性が示されたものである、と考えられる。

これらの具体例では、その多義性が一定程度明瞭に意識化されている。しかし、Ａ氏第２回箱庭制作面接の土偶や埴輪について、なんか、いのちなんだけど、いのちを持ってる人として持ってきたんですけどね（中略）半分いのちじゃないものだっていっていうか（中略）人間ではないいのちになってるというか（中略）そういう感じがして と調査的説明過程で語っているように、土偶や埴輪の多義性はミニチュア選択前に明確に意識化して意図的に選択されたというわけではないと推察できる。また、上に示されたイメージが土偶や埴輪の一般的・普遍的イメージであるとはいいがたい。その点が３と異なる点であると考えられる。

２．箱庭制作者とミニチュアとの関係性における多義性

２の具体例は、箱庭制作者とミニチュアの関係性についての多義性が示された。Ａ氏第１回箱庭制作面接の具体例では、ミニチュアと箱庭制作者とは、守り・守られるという両方の関係性にあった。このように２では、多義性がミニチュアと制作者自身との関係性において語られている点において、１との差異があった。イメージに集約された多様な事柄の内、ミニチュアと箱庭制作者自身の関係に焦点化された、ミニチュアの多義性に関する主観的体験であると捉えられる。

この具体例におけるイメージの多義性も本ミニチュアの一般的・普遍的イメージであるとはいいがたい。それが３と異なる点であると考えられる。

３．普遍的な意識としての両義性

３は、イメージの集約性とは、異なる特性によるミニチュアの多義性だと考えられる。それは、３では、１に比べて、両義的・多義的なミニチュアであることが、箱庭制作者にかなり明瞭に意識され、その上で意図的に選択しようとしているためである。第５回箱庭制作面接で、Ａ氏は蛇を探した。その行為に関して内省報告では、蛇には善悪両方のイメージがあって、賢さを象徴しているとしたらその反対はおろかさになると思った（Ａ氏内省、5-8、調査・意味）としている。このようにＡ氏は、蛇に善悪、賢さとおろかさという両義的なイメージがあることを、明瞭に意識している。イメージの集約性は、イメージそのものの特性であり、それは意識の状態も反映されるが、無意識的な過程が大

きく関与していると考えられている。そして、河合隼雄（1967）の例のように、面接の展開に応じて、その多義性が意識化されていく（pp.117-119）。それに対して、本具体例の場合、箱庭制作過程の段階で、神的要素をもった蛇を意図して探しており、調査的説明過程では、賢さとおろかさの象徴という両義性の意識化も比較的容易になされている。さらに、内省報告の記述は、A氏がこの箱庭制作以前から、蛇に善悪両方のイメージをもっていたと、推察することができる。Vries（1974）は、蛇の象徴的意味を記している。蛇は多様な象徴的意味・イメージをもつが、その中に「すべての動物の中でもっとも霊的な動物」、「ヘビの姿をしたアガサダイモンは、善霊でもあり悪霊でもある」、「すべてのものに宿る邪悪を表す」（p.562）という両義性が記されている。このように両義性が広く一般的に意識されているイメージがあり、この具体例の蛇もそのような例にあたると考えられる。普遍的な意識として、そのイメージの両義性が認知されている例ということもできるだろう。そのため、本具体例は、ユング心理学でいうイメージの集約性とはいいがたいと思われる。３は、その両義性・多義性が一般的にも明瞭に意識化された内的プロセスについての主観的体験である、と考えられる。

４．ミニチュアのイメージや意味が複数の可能性をもつ状態

４は、ミニチュアのイメージや意味が、一つに定まらず、複数の可能性をもつ状態についての主観的体験と考えられる。A氏第１回箱庭制作面接のマリア像と教会の色について、それが距離感に由来するのか、おごそかさというミニチュアの特性に由来するのか、明確には把握できていないと推測できる語りを行った。また、遠くにあるという距離感について、内省報告には、箱庭制作中の意識のあり様と、自己の心の特性の両観点から捉えようとしていることが示された。しかし、この点においても、曖昧さが残る記述となっていた。この具体例は、ミニチュアを巡って、そのイメージや意味が、複数の可能性をもったあいまいな状態であったため生起した、と考えることができるだろう。以上、検討してきたように、４はミニチュアの意味の意識化の明瞭度が低い内的プロセスに関する主観的体験である、と考えられる。

［ミニチュアの多義性］の具体例を意識化の明瞭度の観点から考えると、３は明瞭に意識化し意図的に選択しようとした主観的体験、４は意識化の明瞭度の低い多義性と考えられる。１と２は、それらの中間に位置づけられよう。

２）［イメージや感覚をミニチュアで表現する困難］の詳細と検討

［イメージや感覚をミニチュアで表現する困難］は、「内的なイメージを現物のミニチュアで表現する困難」と定義された。本概念の具体例には、１．現物のミニチュアでイメージや感覚を表現することの困難、２．ミニチュアによるイメージ表現の困難を構成によって克服する積極性、の２つのタイプがあった。２の具体例では、構成も関連するため、厳密には④**【内界と装置と構成の交流】**の概念**［代替としてのミニチュア選択や装置の利用］**で、取り上げるべ

きである。しかし、本概念とも関連が深いため、本稿でも検討する。

（1）－1．現物のミニチュアでイメージや感覚を表現することの困難の詳細

Ａ氏は、第２回箱庭制作面接で、北海道の民芸風の木彫りの夫婦人形を一度、砂箱に置くが、その後、棚に戻し、他の人形を探した。その箱庭制作過程に関して、内省報告に、いのちだけれどまだ動いていないものがよかったけれど、それが何で表現できるのかわからなかった（Ａ氏内省、2-10、制作・感覚）、と記した。Ａ氏の内的感覚は、北海道の民芸風の木彫りの夫婦人形ではうまく表現できなかったのだ、と捉えられる。

Ａ氏は、第８回箱庭制作面接で、白い人形の左後ろや真後ろに、アイヌの男の人形を置いてみるが置くのをやめ、アイヌ夫婦人形を棚に戻した。その箱庭制作過程について、自発的説明過程において、以下のように語った。あちらのお父さんがいないわと思って、●（夫の姓）の父がいない。＜ふんふん＞で、でも、めおとになるような雰囲気の人形もちょっと探せないというのと、（中略）アイヌの女性を真ん中にしたらどうかなと思ったけど、だいぶ雰囲気が違うので、ちょっと置けないわと（Ａ氏自発、8-12）。このようにＡ氏は、夫の父母のイメージにぴったりする雰囲気をもったミニチュアが見つけられない状況について語った。

Ｂ氏は、第１回箱庭制作面接で、悲しむしぐさをした人形を、砂箱右下隅においた。その箱庭制作過程について、自発的説明過程において、いろんな災難があって、災難というものを、あの、充分表現しきれなくて、（Ｂ氏自発、1-47）と語った。Ｂ氏は、悲しむしぐさをした人形を使用したが、その自己の内的感覚を充分に表現しきれていない思いを語った。

これらの具体例は、内的イメージや感覚を、ミニチュアで表現する際の困難を示している。どのミニチュアで表現できるかわからない場合、雰囲気がぴったりするミニチュアが見つけられないと感じる場合、ミニチュアを選択したものの、そのミニチュアでは自己の内的感覚を充分には表現しきれていないと感じる場合があることが示された。

（1）－2．現物のミニチュアでイメージや感覚を表現することの困難の検討

［イメージや感覚をミニチュアで表現する困難］は、既成のミニチュアにより、内的イメージや感覚を表現する困難と考えられる。どのミニチュアで表現できるかわからない場合、イメージにぴったりする雰囲気をもったミニチュアが見つけられない場合、ミニチュアを選択したものの、そのミニチュアでは自己の内的感覚を充分には表現しきれていないと感じる場合があることが示された。この困難は、箱庭療法では、少なからず起こる現象であり、先行研究においても多くの指摘がなされている（河合、1969、p.4;東山、1994、p.10、pp.31-33;弘中、2002、p.76;他）。これらの具体例は、現物の＜もの＞が＜こころのこと＞になっていく過程における限界を示した主観的体験のデータと考えることができる。

（2）－1．ミニチュアによるイメージ表現の困難を構成によって克服する

積極性の詳細

以下の具体例では、内的イメージをミニチュアでは表現できないことを制作者が明瞭に意識し、その上で、意図的・積極的に構成によってその困難を克服した。B氏は第1回箱庭制作面接で、砂を掘り、砂箱の底の青い色を利用して、砂箱中央に水の表現を行った。その表現を巡って、自発的説明過程では、その湧きあがる水を表現したかった。つまり、もりあがる。こんこんとわきあがってくるような。それを物を使って表現することができなかったので、それを真ん中でこの下地の青を利用してというところで、そのしたんですけど（B氏自発、1-2)、と語った。調査的説明過程では、その内的プロセスについて、以下のように、さらに詳細な報告がなされた。そこに置いてあるフィギャーなんかを見ると、例えば、宗教的な建物とか、仏像だとか、マリア像だとかあるわけですよね。まあ、私自身、（中略）そういったもので表わされる大切なものとか、意識として、やっぱりあるわけですよね。で、たぶん、水といったところで表したものが、そういうものにつながっているようなところがあるんだけども、うん、その実際にそれを表わすのに、十字架を置くとか、マリア像を置くかというと、それには、抵抗があったわけです。<なるほど>で、つまり、それが、あの、いかに、その、表現しつくせない人為的な、その、形っていうんでしょうか。シンボルっていうか、うん、で、それを置くとかえって、その、自分が感じているとか、思っている、その、こんこんとわき出るような躍動感とかいう意味でなんか、表わすにはちょっとみすぼらしすぎるというか。うん、でまあ、それは逆に選ぶ気になれなかった（B氏調査、1-2)。

（2）－2．ミニチュアによるイメージ表現の困難を構成によって克服する積極性の検討

本項の具体例では、内的イメージをミニチュアでは表現できないことを制作者が明瞭に意識し、その上で、意図的・積極的に構成によってその困難を克服した。B氏第1回箱庭制作面接で、B氏は、ある種のミニチュアで表現することに抵抗感を感じ、それらのミニチュアでは表現しつくせないことの意味が明確に把握していた。そして、その内的イメージを表現するために、ミニチュアを使用することはせず、構成によって表現することを制作者は意図的・主体的に選択した、理解できる。

本項の具体例は、前項の内的プロセスとは、質の異なる主体的体験だと、捉えられる。箱庭制作者は、自己の内的プロセスをミニチュアでは表現しつくせないことを明確に把握し、砂や砂箱の青を利用して水の構成を行うことによって、よりぴったりな表現を行った、と捉えられる。これは、既成のミニチュアがもつ表現の限界を構成によって克服し、ぴったりした表現を可能にする箱庭制作の特性が明示された例と考えることができる。

Ⅵ. まとめ

①**【内界と装置の交流】**は、『単一回の制作過程・作品』内の『制作過程』における「内界」と「装置」との交流に関するコアカテゴリーである。「内界」と「装置」は、交流し、双方向で影響を与えあっていた。それには、1）「装置」から「内界」への影響、2）「内界」から「装置」への影響、3）双方向の影響があった。本稿のまとめとして、①**【内界と装置の交流】**で見いだされた促進機能について確認する。

①**【内界と装置の交流】**は、内界と装置が交流することによって、ミニチュアに箱庭制作者の内的プロセスが重なりあい、ミニチュアが単なるモノではなくなっていく過程である。この過程は現物の＜もの＞であるミニチュアが＜こころのこと＞（藤原、2002）になっていく主観的体験であると考えられる。現物の＜もの＞であるミニチュアが＜こころのこと＞になっていくことによって、ミニチュアは箱庭制作者の心を表現するものとなり、そのことを通して、箱庭制作面接は箱庭制作者の自己理解・自己実現・自己成長の促進に寄与できると考えることができる。本コアカテゴリー内には、**【内界と装置の交流】**を示す多様な主観的体験があった。

1）「装置」から「内界」への影響には、**［ミニチュアにより喚起される内的プロセス］**があった。**［ミニチュアにより喚起される内的プロセス］**によって、ミニチュアは単なるモノではなくなり、箱庭制作者の内的プロセスが重なりあっていく主観的体験が見い出された。この促進機能に対して、外在化されたイメージ、視覚的体験のフィードバック効果、イメージの集約性、直観的な意識、図と地、前概念的体験など心理療法におけるさまざまな現象や概念と関連づけて、検討した。検討によって、本概念は、箱庭制作面接における促進機能の一因であることが確認された。

2）「内界」から「装置」への影響には、**＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞**とその中に3概念があった。

＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞には、意識的に内的プロセスをミニチュアに付与する具体例が多く見いだされた。それは、現物のモノを○○として見たてる、みなすという心理的機制であると考えられた。また、箱庭制作面接における、そのような意識的なプロセスの意義について検討した。意識的なプロセスであるからといって、そのことだけで意義が小さいとはいえないことが確認された。また、**＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞**は、意識的なプロセスであるが、意味を意識的に付与する前後に別の内的プロセスがあり、それらが連動する複合的な過程によって、箱庭作品が、意識が勝ちすぎたものとなる危険性が軽減する、と考えられた。

［自己像としての認識］と**［ミニチュアの特性が自己の特性でもあるとの認識］**について検討した。**［自己像としての認識］**にも、一つの箱庭作品の中に、複数の自己像が置かれる場合があり、それと**［ミニチュアの特性が自己の特性**

でもあるとの認識］との異同について検討した。

［**不明瞭なミニチュアの意味や特性**］に見られたように、明瞭な意識化が伴わずに、内的プロセスの一部のみが意識化される場合があることが示された。**＜ミニチュアに付与された内的プロセス＞**内の具体例や他の２概念に比べ、本概念は、無意識的な内的プロセスにより比重のある主観的体験の一様相である、と考えられた。

３）内界と装置との双方向の影響に関する概念［**ミニチュアの多義性**］、［**イメージや感覚をミニチュアで表現する困難**］の概念には、内界から装置への影響と、装置から内界への影響の双方向の影響関係が見いだされた。

［**ミニチュアの多義性**］には、特性の異なる４つのタイプがあると考えられた。１．イメージの集約性、２．制作者とミニチュアとの関係性における多義性、３．普遍的な意識としての両義性、４．ミニチュアのイメージや意味が複数の可能性をもつ状態、であった。［**ミニチュアの多義性**］の具体例を意識化の明瞭度の観点から考えると、３は明瞭に意識化し意図的に選択しようとされた主観的体験、４は意識化の明瞭度の低い多義性と考えられた。

［**イメージや感覚をミニチュアで表現する困難**］には、１．現物のミニチュアでイメージや感覚を表現することの困難、２．ミニチュアによるイメージ表現の困難を構成によって克服する積極性、の２つのタイプがあった。１の具体例は、現物の＜もの＞が＜こころのこと＞になっていく過程における限界を示した主観的体験のデータと考えることができた。しかし、２．に示されたように、既成のミニチュアによる表現の限界を構成によって克服し、ぴったりした表現を可能にする箱庭制作の特性も見い出された。

謝辞：

佛教大学博士後期課程在学中より、石原宏先生にはご指導いただき、深く感謝いたします。また、原稿内容を確認し、公表を承諾くださった両調査参加者に深謝します。

付記：

本稿は、2014年度南山大学パッヘ研究奨励金Ⅰ-A-２による成果の一部である。

引用文献：

藤原勝紀（2002）. 臨床イメージ法と箱庭 岡田康伸（編集）現代のエスプリ別冊 箱庭療法の本質と周辺　箱庭療法シリーズⅡ 至文堂 pp.126-141.

東山紘久（1994）. 箱庭療法の世界 誠信書房

弘中正美（2002）. 玩具 岡田康伸（編）現代のエスプリ別冊 箱庭療法の現代的意義　箱庭療法シリーズⅠ 至文堂 pp.84-86.

弘中正美（2014）. 遊戯療法と箱庭療法をめぐって 誠信書房

Jung.C.G.（1921）. Psychologischen typen.Rascher Verlag,Zürich.
（ユング,C.G. 林道義（訳）（1987）. タイプ論 みすず書房）
河合隼雄（1967）. ユング心理学入門 培風館
河合隼雄（1977）. 無意識の構造 中公新書
河合隼雄（1991）. イメージの心理学 青土社
河合隼雄（編）（1969）. 箱庭療法入門 誠信書房
木村晴子（1985）. 箱庭療法―基礎的研究と実践 創元社
木下康仁（2003）. グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践―質的研への誘い 弘文堂
木下康仁（2007）. ライブ講義M-GTA―実践的質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて 弘文堂
楠本和彦（2011）. 箱庭制作過程および説明過程に関する質的研究の試み 佛教大学大学院紀要教育学研究科篇,39,103-120.
楠本和彦（2012）.箱庭箱庭制作者の自己実現を促進する諸要因間の相互作用（交流）に関する質的研究 箱庭療法学研究,25（1）,51-64.
楠本和彦（2013）. 箱庭制作者の主観的体験に関する単一事例の質的研究　箱庭療法学研究,25（3）,3-17.
楠本和彦（2014）.M-GTAを用いた箱庭制作面接における連続性に関する促進機能についての検討　人間関係研究 南山大学人間関係研究センター,13,71-101.
倉戸ヨシヤ（2011）. ゲシュタルト療法―その理論と心理臨床例 駿河台出版
光元和憲（2001）. 箱庭療法へのいざない 光元和憲・田中千穂子・三木アヤ 体験箱庭療法Ⅱ―その継承と深化　山王出版 pp.6-29.
岡田康伸（1984）. 箱庭療法の基礎 誠信書房
Perls,F.S.（1969）. Gestalt therapy verbatim:Real People Press.
（パールズ, F.S. 倉戸ヨシヤ（監訳）日高正宏・倉戸由紀子・井上文彦・中西龍一・宮井研治・山田治・土本薫（訳）（2009）. ゲシュタルト療法バーベイティム ナカニシヤ出版）
Perls,F.S.（1973）. The gestalt apprpach & eye witness therapy.:Science and behavior Books.
（パールズ, F.S. 倉戸ヨシヤ（監訳）日高正宏・井上文彦・倉戸由紀子（訳）（1990）. ゲシュタルト療法―その理論と実際 ナカニシヤ出版）
Vries,A.D.（1974）.Dictionary of symbol and imagery:North-Holland Publishing Company.
（山下主一郎（主幹）　荒このみ・上坪正徳・川口紘明・喜多尾道冬・栗山啓一・竹中昌宏・深沢俊・福士久夫・山下主一郎・湯原剛（共訳）（1984）.　イメージ・シンボル事典　大修館出版）